

「夜、瞑想のバッハ」の演奏家たち

今回の選曲のコンセプトは、オルガンに始まりオルガンに終わる、「心の中のミサ」。夜、一人で部屋で静かに時間を過ごすときの、心の平静を取り戻すためのきっかけとして、ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685-1750）の音楽ほど最適なものはない。ぜひ皆さんの暮らしの傍らの音楽として、お役立ていただければうれしい。

クラウドファンディングの際は、「演奏にもこだわって欲しい」旨の声を多くいただいたが、今回の企画でも、前回の「朝バッハ」同様、そこはかなりこだわった。

音源提供元はOTTAVAのライブラリーの大部分を支えるナクソスだが、ナクソスが安かろう悪かろうの廉価レーベルだという認識は完全に時代遅れである。確かに地味な名前が多いし、昔は玉石混濁だったかもしれないが、近年では錚々たる実力派演奏家も多くそろえた、一流のリーディング・レーベルとなった。そこから演奏を厳選したということをお伝えしておきたい。

林田 直樹

1) 永遠の父なる神よBWV 669

12) フーガ 変ホ長調 「聖アン」 BWV 552

冒頭と最後の2曲でオルガンを弾いているヴォルフガング・リュプザムは、1946年ドイツ出身。ヘルムート・ヴァルヒャとマリー＝クレール・アランという戦後を代表する二人のオルガニストに師事している。リュプザムの演奏キャリアは長く、1970年代にはオランダの名門フィリップスからバッハのオルガン作品集全集をリリースしており、ドイツ・グラモフォンやハルモニア・ムンディ、そしてナクソスを含めると総リリース枚数は130枚を超える。バッハ以前のものから現代曲までレパートリーも幅広く、自身作曲家でもある。現代を代表する名オルガニスト・鍵盤楽器奏者といっても過言ではない。

2) フルート・ソナタ ホ短調 BWV 1034

～ 第3楽章 アンダンテ

バロック・フルートのパウリーナ・フレッドは1974年フィンランド生まれ、アムステルダムで古楽を学んでいる。フレッドはフィンランドのみならずヨーロッパ各国の古楽アンサンブルで活躍しており、美しい揺らぎのあるフルートの可憐な音色が素晴らしい。

同じくフィンランド人でチェンバロのアーポ・ハッキネンは1976年生まれ。巨匠グスタフ・レオンハルトの薫陶を受けており、現在は指揮者としても活躍、ヘルシン

キ・バロック・オーケストラの音楽監督を務めている。

この二人のデュオによるバッハのフルート作品集（2015年録音）は、曲ごとに楽器を変えるなど音色の変化も見事で、ナクソスの隠れた名盤である。

3) マタイ受難曲 BWV 244～第3部 第65曲 アリア「おのれを清めよ、わが心よ」

11) 我は満ち足れり BWV 82 ～アリア「まどろめ、疲れた目よ」

この2曲のアリアを格調高く歌っている1970年生まれのハンノ・ミュラー・ブラッハマンは、ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウに学んだドイツのバス・バリトン歌手。ダニエル・バレンボイム指揮によるベルリン国立歌劇場で、「フィガロの結婚」のフィガロ、「ドン・ジョヴァンニ」のレポレツォやマゼット、「コジ・ファン・トゥッテ」のグリエルモなどを歌っているほか、ガーディナー、ヘレヴェッヘ、リリングらの指揮のもとバロック作品のソリストを多くつとめてきた。

ナクソスのバッハ作品の大半を録音しているケルン室内管弦楽団は、大指揮者ヘルマン・アーベントロートによって創設されたオーケストラ。ヘルムート・ミュラー＝ブリュール（1933-2012）はその弟子にあたり、1963年より半世紀近くこのオケを率いてきた指揮者。驚くべきはその演奏の若々しさとみずみずしさである。

4) ヴァイオリンとチェンバロのためのソナタ第2番 イ長調 BWV 1015 ～第3楽章

1946年生まれのアランダのバロック・ヴァイオリン奏者ルーシー・ファン・ダールは、かつてフランス・ブリュッヘンとともに18世紀オーケストラの創設に携わり、コンサートマスターとしても活躍した、古楽界の重要人物である。彼女の見事な演奏がナクソスに録音されていることは、もっと知られて良い。

ここでチェンバロを弾いているのは、1947年生まれのアランダの鍵盤楽器奏者ボブ・ファン・アスペレン。巨匠グスタフ・レオンハルトの弟子で、指揮者としても活躍している。レコーディングも多い。

5) 無伴奏チェロ組曲第6番 二長調 BWV 1012 ～第4曲サラバンド

近年、ロシアの古楽シーンが面白くなってきている。1960年モスクワ生まれのチェリスト、アレクサンドル・ルーディンはその中心人物だ。こうした古楽奏法で低いピッチの音でバッハを弾くかと思えば、チャイコフスキーやプロコフィエフもばりばり弾く。ちなみに、彼が音楽監督をつとめ、モスクワを本拠としているムジカ・ヴィーヴァ室内管弦楽団はバロックから現代まで幅広い柔軟性を持ち、ナントのラ・フォル・ジュルネにもしばしば参加していることを指摘しておこう。

6) 音楽の捧げもの BWV 1079-トリオ・ソナタ ハ短調 ～アレグロ

スイス・バロック・ソロイストは、ロシア系フランス人を両親に持つ1976年アルゼンチン生まれのヴァイオリニスト、アンドレス・ガベッタ(妹はチェリストのソル・ガベッタ)が率いていた凄腕アンサンブル。そのレヴェルの高さは、彼が現在率いる古楽器オーケストラ「カペラ・ガベッタ」(ソニークラシカルでリリース中)に継承されている。この演奏はブランデンブルク協奏曲全曲を収録した2枚組のなかに収められているが、透明感のある音色が見事である。

7) モテット「恐れることなかれ、われ汝とともにあり」BWV 228

1960年代にロンドンのチェルシー・タウン・ホールか

ら活動を開始した、カウンターテナーを含む少人数ヴォーカル・グループの「スコラズ」は、英国古楽界におけるヴォーカル・アンサンブルの老舗的存在である。彼らはやがて「スコラズ・バロック・アンサンブル」へと発展、ナクソスにヘンデル、バッハ、パーセルなどの声楽曲を録音している。ほのぼのとしたアンサンブルに独特の持ち味がある。

8) 9) 平均律クラヴィーア曲集 第2巻 ～前奏曲とフーガ第9番ホ長調BWV 878

1958年カナダ・ケベック州生まれのリュック・ボーセジュールは、トン・コープマンおよびケネス・ギルバートに学んだ古楽鍵盤楽器奏者。バッハを中心に北ドイツ・オルガン楽派やフランスのバロック音楽をレパートリーとしている。ナクソスへの録音では、バッハの「平均律クラヴィーア曲集」(全2巻)が豊かな雰囲気と満ちた香り高いチェンバロの演奏で、名だたる古今の名演にまったくひけをとらない。前回の朝バッハでは「第1巻」から1曲選曲したが、今回は「第2巻」から1曲選んだ。

10) オーボエ・ダモーレ協奏曲 イ長調 BWV 1055 ～第2楽章ラルゲット

この曲で息の長い見事なソロを吹くトーマス・ステイシーは、1938年生まれの米国のイングリッシュ・ホルン奏者で、ニューヨーク・フィルに1972年から2010年まで在籍し、広く敬愛された名物プレイヤーである。「イングリッシュ・ホルンのハイフェッツかクライスラーだ」(ニューヨーク・タイムズ紙)とまで称賛された彼が、ナクソスに2枚のCDを入れているのは貴重である。

弦の響きの艶やかなトロント室内管弦楽団を指揮するケヴィン・マロンは、北アイルランドのベルファストで育ち、ジョン・エリオット・ガーディナーに学び、レ・ザール・フロリサンのコンサートマスターを務めていた。近年はバロック・オペラを多く指揮する一方、フィドラーとしてアイルランド伝統音楽を演奏したり、テレビドラマの音楽を作曲したりと幅広い才人。近年ナクソスには膨大な数のバロック音楽を録音しており、そのいずれもが鮮やかな演奏である。

林田 直樹(音楽ジャーナリスト・評論家)